

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年5月24日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03734

研究課題名(和文) SNS利用のリスク認知に関する教育社会心理学的解明と教材開発への応用

研究課題名(英文) Development of educational materials about SNS-use risks based on educational and social psychological researches of risk perception

研究代表者

岡 隆 (OKA, Takashi)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：80203959

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、SNS利用経験のある若年者を対象として、SNS利用に対するリスク認知の特徴を明らかにするとともに、リスク認知を踏まえた情報モラル教育の教材の開発を行うことを目的とした。高校生を対象とした調査により、若年者にも自己リスクの楽観視(第三者知覚)が頑健に存在することを明らかにした。その結果を踏まえ、自己リスクの楽観視に関する心理学的メカニズムの解説を含めた情報モラル教材を開発した。中高生を対象として講座を実施した結果、受講者は受講後に自己リスクの楽観視が低減することが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では自己リスクの楽観視の要因の1つとして自尊心防衛があることに着目し、その心理学的メカニズムを学習することで楽観視を低減する方略を考え、情報モラル教材に取り入れた。事例的に効果検証を行った結果、受講者の自己リスク楽観視は受講前より受講後の方が低減したことから、当アプローチが有効であることが示唆された。自己リスクの楽観視が存在することはこれまで多数の研究により報告されてきたが、その低減方略に関する研究はまだ少ない。本研究成果はその意味で学術的な意義、および効果的な情報モラル教材の開発事例として社会的にも意義のある取組みであるといえる。

研究成果の概要(英文)：The present study aimed to explore the tendency of risk perception of SNS-usage among Japanese young adults and develop effective educational materials concerning with these risk perceptions. We conducted the surveys accessing the risk perception among Japanese high school students and revealed that participants had optimistic risk perception toward their own risks robustly as well as adults. Following these findings, We developed an educational material about SNS-use risks for young adults which includes psychological mechanisms of optimistic risk perception. Results of a case lecture demonstrate that the degrees of optimistic risk perception of participants were decreased after the lecture. These results suggest that teaching the psychological mechanisms of optimistic risk perception would be an effective way to communicate information morals.

研究分野：社会心理学

キーワード：リスク認知 情報モラル 教材開発 SNS

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

近年、SNS (social networking service) の利用者増加に伴い、SNS 利用を通じて若年者が個人情報漏えいやいじめ、犯罪等のトラブルに巻き込まれる事例が増加している。現在、学習指導要領においても情報モラル教育の充実が求められており、児童・生徒の発達段階に応じた学校教育が実施されている他、各関係団体により様々な教育啓発活動が継続的に行われている。その一方で、情報モラルに関する不適切な行動やトラブルは現在も後を絶たないことから、情報モラルに関する知識と行動との乖離の背景にある心理学的要因を明らかにし、教育プログラムの改善に活かすことも重要であろう。

SNS 利用の危険性に対する適切なリスク認知や対策行動を促すには、人間の社会的認知を考慮する必要がある。情報リテラシー領域においては、ユーザは安全利用に関する知識・態度は有している一方で、実際には安全な利用行動をとらないという「知識と行動の乖離」(A-B dichotomy)が問題となる。これはたとえば、個人情報漏えいの危険性を認識しているものの、個人特定につながる情報を SNS 上で開示しているような状態で、「プライバシー・パラドクス」とも呼ばれる。このような人間の非合理的行動を前提としてユーザの SNS 利用リスクに対する適切なリスク認知や対策行動を促すには、SNS 利用リスクに関するユーザの教育社会的認知特性の把握と対策が不可欠である。たとえば、自分に対するリスク生起率を他人よりも低く見積もる第三者知覚 (third-person perception) といった楽観的な認知傾向がある<sup>4</sup>。近年の「バカッター」などと呼ばれる SNS での不適切行為の投稿は、各事件が報道された後も類似事件が後を絶たない。これは SNS の適正利用やリスクに関する情報を知識としては有しているものの、“自分は大丈夫”といった楽観的リスク認知により知識が行動に反映されないことを示唆している。そこで、リスク教育においては、ユーザの楽観的リスク認知を前提とした上で、リスクを自分のこととして捉えリスク対策行動を促すリテラシー教材が必要と考えられる。

### 2. 研究の目的

本研究では、SNS 利用リスクに関わるユーザの認知特性を明らかにするとともに、その基礎的知見に基づくリスクリテラシー教材を開発することを目的とした。具体的には、(1) SNS 利用に対するリスク認知や感性評価とその個人差に関する調査研究、(2) SNS トラブルに関わるステレオタイプ等の社会的認知とそのメカニズムに関する調査研究、(3) 教授法や教材開発に関する研究開発、に関する研究プロジェクトを並行して実施し、それぞれの成果を相互に参照することで、循環的に研究を推進した。紙面の都合上、以降ではこれらの研究のうち「若年 SNS ユーザの第三者知覚」と「第三者知覚を考慮した SNS 情報モラル教材の開発」についてそれぞれ概要を述べる。

### 3. 研究の方法

(1) 若年 SNS ユーザの第三者知覚：WEB 調査により、SNS 利用経験のある高校生 500 名（男子 250 名，女子 250 名，15 歳～18 歳，平均年齢 17.0 歳）を対象として調査を実施した。調査では、SNS 利用に関するリスク認知およびトラブル経験、インターネットリテラシー、認知熟慮性および個人属性を、それぞれ先行研究を参照して作成した項目により測定した。

(2) 第三者知覚を考慮した SNS 情報モラル教材の開発：第三者知覚の生起要因の 1 つに自尊心防衛があることから、第三者知覚の心理メカニズムを学習することで自尊心防衛のための戦略の変容が生じ、第三者知覚が低減するという仮説を立てた。すなわち、「自尊心防衛のためにリスクを楽観視している人は望ましいといえない」こと、「リスク認知についての知識を有しリスクの楽観視をしない人が望ましい」ことに気づくよう教材で促すこととした (図 1)。教材は授業用スライドの形式で作成し、ソーシャルメディアの活用例、SNS トラブルのメカニズム、リスク認知を考慮したトラブル対策、の 3 章から構成される約 40 分のコンテンツとした。なお、ソーシャルメディアの活用例の章では、SNS は中高生のみならず大学生や社会人になっても利用される場合が多く誰もがリテラシーを修得する必要があることを、SNS トラブルのメカニズムの章では SNS での記事投稿によるトラブルの要因として匿名性があることを、リスク認知を考慮したトラブル対策の章では第三者知覚の解説と、自己リスク楽観視を踏まえた具体的対策について解説した。



図 1 第三者知覚に関する学習スライドの例

#### 4. 研究成果

(1) 若年 SNS ユーザの第三者知覚：各トラブル項目について、主観的自己リスク評定値と主観的他者リスク評定値を比較したところ、すべての項目において主観的他者リスクの方が主観的自己リスクよりも評定値が高かった（表 1）。さらに、認知熟慮性に基づき調査参加者を「直観群」と「熟考群」に分類して群間でリスク認知を比較したところ、主観的自己リスクは群間で差がみられなかった一方で、主観的他者リスクについては、「冗談」「誤解」「暴露」においてそれぞれ熟考群の方が評定値が高かった（表 1）。また、本人過失推定について、「冗談」「誤解」「けんか」において、それぞれ熟考群の方が本人過失を高く推定した（表 2）。自己対策度は群間で差がみられなかった。トラブル経験量を群間で比較したところ、「誤解」において熟考群の方が直観群よりも有意にトラブル経験量が多かった（表 2）。

調査の結果、高校生においても SNS 利用リスクに対する第三者知覚が頑健に示された。全体として主観的他者リスクが平均 3.0 程度であったことに対して主観的自己リスクは平均 2.5 程度であり、他者と比べて自分がトラブルに巻き込まれる可能性は少ないと認知していることが伺える（表 1）。従来、大学生や社会人においては SNS 利用リスクに関する第三者知覚の存在が示されていたが<sup>5</sup>、本結果により高校生においても自己リスクの楽観視があることが定量的に示された。また、認知熟慮性とリスク認知の関連を調べたところ、主観的自己リスクは群間で差がなかったものの、主観的他者リスクについては「冗談」「誤解」「暴露」といった対人トラブルにおいて熟考群の方がリスクを高く評定した。これは熟考群の方が第三者知覚の度合いが大きいことを示唆する。関連して、本人過失推定も「冗談」「誤解」「けんか」といった対人トラブル関連の項目において、熟考群の方が本人過失を高く推定した。これらの結果から、熟考群は「SNS の対人トラブル被害者は本人にも非がある部分が多く、非のない自分は大丈夫」といった楽観的認知の傾向が強い可能性もある。

表 1 自己リスクの楽観視に関する設問の平均評定値（各 5 段階評定、カッコ内は標準偏差）

カテゴリ	全体 (n=500)			直観群 (n=130)		熟考群 (n=370)		群間差 (t 値)	
	自己リスク	他者リスク	t 値 <sup>1)</sup>	自己リスク	他者リスク	自己リスク	他者リスク	自己リスク	他者リスク
冗談	2.6 (1.3)	3.4 (1.4)	<b>11.7**</b>	2.6 (1.3)	3.3 (1.4)	2.6 (1.3)	3.6 (1.2)	0.0	<b>2.3*</b>
誤解	3.1 (1.3)	3.4 (1.4)	<b>5.6**</b>	3.1 (1.3)	3.3 (1.4)	3.1 (1.4)	3.6 (1.2)	0.5	<b>2.3*</b>
喧嘩	2.3 (1.3)	3.2 (1.4)	<b>13.9**</b>	2.3 (1.3)	3.1 (1.4)	2.3 (1.3)	3.4 (1.3)	0.4	1.9+
特定	2.3 (1.4)	3.0 (1.3)	<b>10.5**</b>	2.3 (1.4)	2.9 (1.4)	2.3 (1.4)	3.2 (1.2)	0.1	2.0+
暴露	2.7 (1.4)	3.2 (1.4)	<b>7.6**</b>	2.7 (1.4)	3.1 (1.4)	2.9 (1.5)	3.4 (1.3)	1.9+	<b>2.2*</b>
なりすまし	2.2 (1.4)	2.9 (1.3)	<b>11.5**</b>	2.2 (1.4)	2.9 (1.4)	2.1 (1.3)	2.9 (1.2)	1.0	0.0
炎上	2.3 (1.4)	3.1 (1.4)	<b>11.7**</b>	2.3 (1.4)	3.1 (1.4)	2.3 (1.3)	3.3 (1.3)	0.3	1.5
乗取り	2.3 (1.4)	2.9 (1.3)	<b>10.7**</b>	2.3 (1.5)	2.9 (1.4)	2.1 (1.4)	3.0 (1.3)	1.1	0.4

+  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ .

<sup>1)</sup> 主観的自己リスク評定値と主観的他者リスク評定値の差についての t 値（対応のある t 検定）

表 2 リスク認知・行動に関する設問の平均評定値（カッコ内は標準偏差）

カテゴリ	自己対策度 (1-5 点)			本人過失推定 (0-100%)			トラブル経験量 (0-2 点)		
	直観群	熟考群	t 値 <sup>2)</sup>	直観群	熟考群	t 値 <sup>2)</sup>	直観群	熟考群	t 値 <sup>2)</sup>
冗談	2.9 (1.3)	3.1 (1.3)	1.6	48.2 (34.3)	60.8 (31.5)	<b>3.7**</b>	0.3 (0.6)	0.3 (0.6)	0.4
誤解	2.9 (1.3)	3.0 (1.3)	0.8	38.6 (29.8)	48.4 (26.8)	<b>3.3**</b>	0.5 (0.7)	0.7 (0.8)	<b>2.5*</b>
喧嘩	2.8 (1.3)	2.9 (1.4)	1.2	40.1 (28.5)	47.9 (22.2)	<b>2.8**</b>	0.3 (0.6)	0.3 (0.6)	0.5
特定	2.6 (1.3)	2.7 (1.3)	1.0	29.7 (30.4)	30.3 (27.7)	0.2	0.2 (0.4)	0.2 (0.5)	0.9
暴露	2.6 (1.3)	2.7 (1.3)	0.3	24.4 (29.0)	20.0 (25.1)	1.5	0.3 (0.6)	0.4 (0.7)	1.7+
なりすまし	2.6 (1.3)	2.5 (1.3)	0.5	23.4 (30.2)	18.2 (25.7)	1.7+	0.2 (0.4)	0.1 (0.5)	0.2
炎上	2.6 (1.3)	2.7 (1.3)	0.3	39.6 (32.6)	45.6 (30.4)	1.8+	0.2 (0.5)	0.2 (0.5)	0.0
乗取り	2.7 (1.4)	2.7 (1.3)	0.3	30.5 (34.0)	32.8 (32.6)	0.7	0.1 (0.4)	0.1 (0.4)	0.1

+  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ .

<sup>2)</sup> 直観群と熟考群の各評定値の差についての t 値（対応のない t 検定）

(2) 第三者知覚を考慮した SNS 情報モラル教材の開発：開発した教材を用いた中高生向けの SNS 講座を実施し、教材の効果を検証した。参加者は中学 1 年生から高校 3 年生までの男女 11 名であり、2018 年 8 月に実施した。まず、講座実施前に実施した調査の結果、参加者も自己リスクを他者リスクよりも低く推定する傾向がみられ、第三者知覚を有していることが示された。その後、開発教材を用いた講座を実施し、講座終了後に調査を実施した。その結果、参加者は講座後には自己リスクを他者リスクと同等に高く評価し、第三者効果が消失した ( $t(10) = 0.0$ ,  $n.s.$ ; 図 2)。また、講座内容の評価を各 5 段階 (5: とても思う ~ 1: まったくそう思わない) で評価させたところ、「理解度」は平均 5.0 ( $SD =$

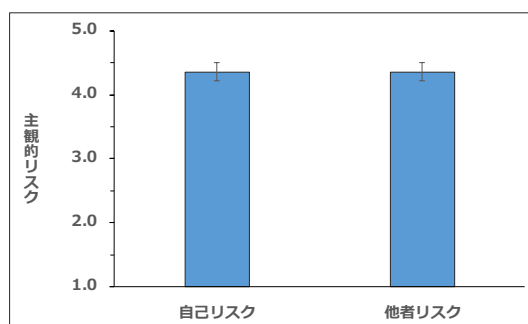


図 2 講座後の自己・他者リスク平均評定値

0)、「主体的思考(リスクを主体的に考えることができたか)」は平均 4.7 ( $SD = 0.4$ ) と、全体として高評価であった。なお、自由記述感想にも「普段 SNS を使わないので少し他人事のように考えていた部分もあったが、大学生になったらいずれ使うものであり、また、第三者知覚により自分のリスクを楽観視してしまいがちという話を聞いたので、対策を考えていくべきだと思った」「自分より他人のリスクが高いと思っていたが、この話を聞いてそうではなくなった」など、第三者知覚に関するコメントが多数寄せられた。

以上の結果から、第三者知覚の心理メカニズムについての学習が第三者知覚の低減に寄与する可能性が示された。参加者は中学 1 年生から高校 3 年生まで学年の幅があったが、全体として講座に対する理解度や主体的思考は高く、効果的な情報モラル教材であるといえる。効果検証については、サンプル数が必ずしも多くないため、今後も様々な対象者に向けて開発教材を用いた情報モラル教育を実施し知見の一般化を進めたい。また、対象者の認知熟慮性と講座の効果との関係についても今後検証する必要がある。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 23 件)

- [1] 木村敦、SNS のプライバシー設定行動と社会的認知との関係についての調査研究、危機管理心理学研究、査読有、3 巻、2019、44-62
- [2] 堀川佑惟、岡隆、ATLG Scale 日本語短縮版の作成と信頼性・妥当性の検討、日本大学心理学研究、査読有、40 巻、2019、42-51
- [3] 堀川佑惟、岡隆、レズビアンとの仮想接触における言語的・行動的測度の順序効果の検討、日本大学心理学研究、査読有、40 巻、2019、38-41
- [4] 李瑋琳、宮下達哉、堀川佑惟、岡隆、偏見の低減への認知的不協和理論に基づく偽善モデルの適用、日本大学心理学研究、査読有、40 巻、2019、33-37
- [5] 羅竹、堀川佑惟、許燕、藜志軍、岡隆、日本・中国の大学生における学習動機付けと大学適応感が不登校傾向に及ぼす影響—エフォートフル・コントロールと拒絶反応性の検討から—、日本大学心理学研究、査読有、40 巻、2019、27-32
- [6] 田中ゆかり、古川隆久、佐藤至子、林直樹、関田朋子、岡隆、話芸・映像メディアを中心とした社会・文化・言語ステレオタイプの多角的研究、日本大学文理学部人文科学研究研究所研究紀要、査読有、97 巻、2019、235-256
- [7] 伊藤幸子、岡隆、被撮影場面の種類ごとの不安感・満足感と心理特性と環境要因との関連、日本大学文理学部人文科学研究研究所研究紀要、査読有、97 巻、2019、141-162
- [8] 勝谷紀子、岡隆、坂本真士、社会人における「新型うつ」の素人理論の検討、日本大学文理学部人文科学研究研究所研究紀要、査読有、97 巻、2019、129-140
- [9] 松村香、鈴木寛、宇津木孝正、岡隆、児童養護施設に入所している被虐待体験を有する子どもの生活安全感・安心感と精神的健康との関係、日本大学文理学部人文科学研究研究所研究紀要、査読有、97 巻、2019、117-128
- [10] 木村敦、河合萌華、中嶋凌、山本真菜、岡隆、高校生における認知熟慮性と SNS 利用リスクの楽観視との関連、日本教育工学会論文誌、査読有、2018、42 (Suppl)、25-28
- [11] 宮下達哉、木村敦、岡隆、審美的価値観は名画と駄作に対する美的評価と関連するか、日本感性工学会論文誌、査読有、17 巻、2018、561-566
- [12] 堀川佑惟、岡隆、Attitudes Toward Lesbians and Gay Men Scale 日本語 20 項目版 (ATLG-J20) の作成と妥当性の検討、社会心理学研究、査読有、34 巻、2018、85-93
- [13] 勝谷紀子、岡隆、坂本真士、大学生を対象とした「新型うつ」のしろうと理論の検討、心理学研究、査読有、89 巻、2018、316-322
- [14] 山本真菜、岡隆、ステレオタイプ抑制における反ステレオタイプと非有意ステレオタイプの役割、心理学研究、査読有、89 巻、2018、12-21
- [15] 宮下達哉、白川真裕、木村敦、岡隆、Big Five の開放性と美的評価との関連：媒介変数として審美的価値観に着目して、日本感性工学会論文誌、査読有、17 巻、2018、173-185
- [16] 田中ゆかり、岡隆、佐藤至子、関田朋子、林直樹、「話芸」の多角的研究、日本大学文理学部人文科学研究研究所研究紀要、査読有、95 巻、2018、173-185
- [17] 木村敦、危機管理教育に資するための科目間連携を活用した地域連携型教育の実証研究、危機管理心理学研究、査読有、2 巻、2018、92-113
- [18] 松村香、宇津木孝正、岡隆、児童養護施設で暮らす子どもの生活安全感・安心感と精神的健康との関係—「生活安全感・安心感尺度」の改良を通して—、日本大学文理学部人文科学研究研究所研究紀要、査読有、94 巻、2017、47-62
- [19] 宮下達哉、木村敦、岡隆、美的評価の個人差要因：開放性および審美的価値観との関連、日本感性工学会論文誌、査読有、16 巻、2017、315-320
- [20] 杉田房子、岡隆、同調傾向と傍観行動との関係、日本大学心理学研究、査読有、38 巻、2017、12-19
- [21] 山本真菜、岡隆、集団間関係が女性ステレオタイプの抑制による逆説的效果に与える影響：数学能力に関するステレオタイプを用いた検討、日本大学人文科学研究研究所研究紀要、査読有、93 巻、2017 年、35-44
- [22] 宮下達哉、木村敦、岡隆、美的価値観と美的評価の関係についての実験的検討：ヘドニッ

- クトーンと認知的美の評価に注目して、デザイン学研究、査読有、63 巻、2016、25-32
- [23] 増田知尋、村越琢磨、内海建、木村敦、日野明寛、和田有史、聴講者応答システムを利用した食の安全講義の効果測定、日本官能評価学会誌、査読有、20 巻、2016、22-29

[学会発表] (計 34 件)

- [1] 宮下達哉、木村敦、岡隆、審美的価値観と絵画カテゴリ化との関連、第 14 回日本感性工学会春季大会、2019
- [2] 宮下達哉、山村豊、岡隆、大学生のパーソナルスペースは 1 か月で縮まるのか？、日本心理学会第 82 回大会、2018
- [3] 宮下達哉、木村敦、山村豊、岡隆、審美的価値観と他者作品鑑賞態度との関連、第 20 回日本感性工学会大会、2018
- [4] 中嶋凌、河合萌華、木村敦、岡隆、SNS トラブル対処教育におけるピア・エデュケーションの効果、日本教育工学会第 34 回全国大会、2018
- [5] Miyashita, T., Cho, K., Kimura, A., & Oka, T., Individual differences in aesthetic evaluations of visual arts (2): Does aesthetic dimension of value relate to the
- [6] aesthetic evaluations of BAD arts? 41st European Conference on Visual Perception (ECVP) 2018, 2018
- [7] 羅竹、堀川佑惟、岡隆、日中大学生の学習動機付けと大学適応感が不登校傾向に及ぼす影響—自己制御能力と拒絶反応性の検討から—、日本社会心理学会第 59 回大会、2018
- [8] 山本真菜、宮下達哉、堀川佑惟、木村敦、岡隆、SNS 利用におけるリスク認知の第三者効果とその関連要因の検討、日本社会心理学会第 59 回大会、2018
- [9] 堀川佑惟、岡隆、精神疾患者とネガティブなステレオタイプとの連合に仮想接触が及ぼす効果—代替思考としての仮想接触の役割に注目した検討—、日本社会心理学会第 59 回大会、2018
- [10] 宮下達哉、木村敦、岡隆、名画および駄作に対する美的評価と審美的価値観との関連、第 13 回日本感性工学会春季大会、2018
- [11] 木村敦、スピーク・ロウ：大学講義における授業関連私語の許容タイミングの可視化、情報コミュニケーション学会第 15 回全国大会、2018
- [12] Nishimura, K., & Oka, T., A Study on Individualism-Collectivism Stereotypes in Japan: Focusing on Perceived Typical Characteristics of the Americans, British, Chinese, and Japanese. The 19th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, 2018
- [13] Asakawa, A., & Oka, T., Does Stereotype Threat Mediate the Relationship between Stereotype Activation and Stereotype Reactance?: The Effect of Gender Stereotype Activation on Math Performance in Japan. The 19th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, 2018
- [14] Horikawa, Y., & Oka, T., The order effect of verbal and behavioral measures of the attitudes toward lesbians in imagined contact studies. The 19th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, 2018.
- [15] 堀川佑惟、岡隆、Attitudes Toward Lesbians and Gay Men Scale 日本語 6 項目版 (ATLG-J6) と原著との関連の検討、日本社会心理学会第 58 回大会、2017
- [16] 朝川明男、岡隆、数学能力に関する性ステレオタイプの活性化が女性の数学課題成績に及ぼす影響、日本社会心理学会第 58 回大会、2017
- [17] 西村光一、岡隆、集団主義と個人主義に関するステレオタイプの検討：日・中・英・米の典型的な人物像のイメージによる調査、日本心理学会第 81 回大会、2017
- [18] 遠藤忠、谷田林士、岡隆、村山憲男、蛭名直美、下垣光、小野寺敦志、中嶋紀一、認知症の普及啓発活動の効果測定：“視点取得(自分が認知症になったとしたら)”にもとづく顕在的イメージ測定尺度を用いた検討、日本心理学会第 81 回大会、2017
- [19] 宮下達哉、木村敦、岡隆、開放性と審美的価値観の階層構造に関する一考察、日本心理学会第 81 回大会、2017
- [20] 堀川佑惟、岡隆、レズビアンに対する女性異性愛者の態度に仮想接触が及ぼす効果、日本心理学会第 81 回大会、2017
- [21] 山本真菜、宮下達哉、木村敦、岡隆、SNS で問題を起こす人に対するステレオタイプの認知の調査、日本心理学会第 81 回大会、2017
- [22] 河合萌華、中嶋凌、木村敦、岡隆、高校生における認知熟慮性と SNS 利用リスクの楽観視との関連、日本教育工学会第 33 回全国大会、2017
- [23] 宮下達哉、木村敦、岡隆、パーソナリティの開放性と美的評価との関連：媒介変数として審美的価値観に着目して、第 19 回日本感性工学会大会、2017
- [24] 伊藤幸子、岡隆、被撮影場面の種類によるパーソナリティ特性と不安感・満足感との関連の差、日本写真学会 2017 年次大会、2017
- [25] 宮下達哉、木村敦、岡隆、美的評価の個人差要因：開放性および審美的価値観との関連、日本感性工学会 2017 年春季大会、2017
- [26] 木村敦、協調学修において欠席者が挽回できる仕組みの設計と検証、情報コミュニケーション

ョン学会第14回全国大会、2017

- [27] 堀川佑惟、岡隆、同性愛に対する顕在的・潜在的態度と社会的望ましさ反応との関係、日本社会心理学会大会、2016
- [28] 宮下達哉、木村敦、岡隆、Big Fiveの開放性と審美的価値観のどちらが絵画の美的評価と強く関連するか?、日本パーソナリティ心理学会大会、2016
- [29] Miyashita, T., Kimura, A., Oka, T., Individual differences in aesthetic evaluations of visual arts: Focusing on the aesthetic dimension of value and art-expertise. European Conference on Visual Perception 2016, 2016
- [30] Miyashita, T., Kimura, A., Oka, T., The relationship between the aesthetic dimension of value and aesthetic evaluations of paintings: A case study focusing on representational and abstract paintings. The 31th International Congress of Psychology, 2016
- [31] Endo, T., Tanida, S., Murayama, N., Shimogaki, H., Sasaki, S., Ebina, N., Onodera, A., Naito, K., Oka, T., Nagashima, K., Research on attitude toward becoming demented oneself: Developing an attitude scale. The 31th International Congress of Psychology, 2016
- [32] Horikawa, Y., Oka, T., Development and validation of the Japanese version of the Attitudes toward Lesbians and Gay men Scale (ATLG-J), The 31th International Congress of Psychology, 2016
- [33] Yamamoto, M., Oka, T., Classification of stereotypes about female based on their dominance. The 31th International Congress of Psychology, 2016
- [34] 伊藤幸子、岡隆、被撮影場面の種類と不安感・満足感との関連、日本写真学会年次大会、2016

[図書] (計 5 件)

- [1] 坂本真士、岡隆編著、サイエンス社、ポテンシャル社会心理学、2018、272
- [2] 高野陽太郎、岡隆編著、有斐閣、心理学研究法 心を見つめる科学のまなざし 補訂版、2017年、392
- [3] 日本大学文理学部編 (分担執筆: 岡隆他)、筑摩書房、知のスクランブル 文理的思考の挑戦、2017、286 (104-108)
- [4] 北村英哉、内田有紀子編 (分担執筆: 岡隆他)、ナカニシヤ出版、社会心理学概説、2016、398 (1-15)
- [5] リーサ・ウォラック、マイケル・ウォラック著、岡隆訳、新曜社、心の七つの見方、2016、248

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名: 木村 敦

ローマ字氏名: (KIMURA, atsushi)

所属研究機関名: 日本大学

部局名: 危機管理学部

職名: 准教授

研究者番号 (8 桁): 90462530

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名: 坂本 真士

ローマ字氏名: (SAKAMOTO, shinji)

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。